特集

映画「葛根廟事件の証言」完成に添えて

映像ディレクター　田上龍一

「善隣」の読者には「葛根廟事件」のことをご存じの方は多いと思う。昭和20（1945）年8月14日、旧満洲（現中国東北部）興安総省興安街（現内モンゴル自治区ウランホト）から避難していた日本人が、ラマ教寺院葛根廟付近で旧ソ連軍の戦車隊に襲撃され、1000人以上が命を落とした事件である。避難団は民間人で構成され、犠牲者の多くが女性と子どもたちだった。

赤星月人「葛根廟事件邦人遭難の図」（天恩山 五百羅漢寺所蔵）

筆者は、この事件に遭った生存者、事件で家族を亡くした方、当時興安街に住んでいたが難を逃れて帰国した方らに取材し、インタビューで構成したドキュメンタリー映画「葛根廟事件の証言」を制作した。このたび、創作のきっかけや、映画を通じて訴えたいことなどを寄稿する機会を頂戴した。公開未定の無名の映画に対する厚遇に、国際善隣協会へ感謝申し上げるとともに、制作の経緯を振り返りたい。

筆者は現在、テレビ番組制作会社に在籍しながら、インターネットで記事や映像のニュースを配信するメディアに常駐している。映像の仕事に携わるようになったのは、映画監督を志していた学生時代のアルバイトから。学生のときは友人とともに自主映画をつくり、ものをつくる楽しさを経験したが、低予算の商業映画やテレビの報道番組の制作に関わってプロの厳しさを目の当たりにした。数年間離れることもあったが、「いつかは監督に」との思いを胸に、映像業界の周辺をさまよい続け、今に至る。

テレビよりも時間の流れを速く感じるネットメディアで、自分のつくった映像が出ては消え、出ては消え、日々消費されていく。つくっているのがニュースだから当然のことだが、意義のある映像でも一定の期間を逃すとなかなか人の目に触れるのが難しくなる。それがネットメディアの現状だ。「すぐに忘れ去られるものより、後の時代に残るものをつくりたい」、そのような思いは日々強くなっていった。そんなとき、次の記事で葛根廟事件のことを知った。

「『葛根廟』悲劇伝える」

犠牲者の70回忌の今夏、大島さん（筆者注：大島満吉・興安街命日会代表）

たちは生存者ら約60人の証言を集めた「葛根廟事件の証言」（新風書房）を出版した。「つらい過去でも後世に伝え、戦争の恐ろしさを訴えたい」との思いからだ。（２０１４年８月31日付読売新聞より）

この記事では、「大学で史学を専攻したが、取材するまでこの事件を知らず、無知を恥じた」と記者が心情を綴っていた。筆者も同感だった。

そもそも筆者は満洲について何を知っていただろうか。

日露戦争で日本は大陸に「領土」を得た。中国と戦争になった。原爆が落とされた。太平洋戦争に負けた。中学高校の授業で学び、おおまかな近現代史の流れは覚えていても、満洲が授業でどのように扱われたか、余り記憶にない。

筆者が恥ずかしくなったのは、事件のことを知らなかったことだけでなく、満洲から帰還した人たちがどのような苦労をされてきたか、知ろうともしていなかったことである。豊かな生活を求めて新天地に向かい、敗戦時には身ひとつで日本に戻ってきた―。そうした物語はイメージできるものの、満洲という地に住んでいた人たちのことをどこか他人事のようにすら思っていた。

昭和20年当時、満洲には開拓団を含めて約１５５万人の日本人が居留していた。ならばソ連侵攻後、１５５万通りの辛苦があり、地獄があったはずなのに、筆者はそのうちのひとつも知ろうとはしていなかった。

ヒロシマ、ナガサキ、沖縄、東京大空襲。先の戦争で日本が経験した悲劇は、語り手が存在し、それを伝える者がいて、後世の人間は多くを知ることができた。報道だけでなく小説や漫画、映画など様々に形を変えて伝えられることで、教科書で知る以上に人々は悲劇の当事者のことを深く知る。

一方、満洲に関しては、報道、フィクションともに、これまで伝えられる機会が少なかったのではないか。筆者がもっていた「どこか他人事」という感覚は、情報の少なさにも一因があるように思う。筆者のように満洲についてほとんど知らない人はたくさんいるだろう。葛根廟事件に関しては尚更のことである。

戦後70年を経てなお、ほとんど知られていない事実がある。関連書籍に何冊か触れた後、筆者は満洲、事件のことをもっと多くの人に知ってほしいと思うようになった。自分の手で伝えたい。10年、20年先にも残る形で、そして犠牲者の声なき声が聞こえるような形で。それが葛根廟事件をテーマにドキュメンタリー映画をつくろうと思ったきっかけである。

制作開始は２０１５年６月末。大島満吉氏が事件関係者ら約20人に呼びかけて実現した訪中旅行への同行取材からだ。ウランホトを中心に観光し、葛根廟も全員が参拝する。

「おそらくこれほどの人数で行くのはこれが最後」

旅程にはないが、大島氏は事件の遭難現場にも向かうという。筆者は当初、関係者の証言だけを収録して映画を制作する計画だったが、このシャッターチャンスを逃すわけにはいかなかった。

成田から瀋陽に渡った後は、夜行列車でウランホトに向かった。戦時中に興安街に向かったときの行程を再度味わう趣向らしい。筆者は中国を訪れるのは初めて。明け方に列車から見える広大な地平線が美しく、朝日の柔らかいうちにと無我夢中で撮影した。

訪中団が葛根廟を参拝する日の朝、それに先駆けて大島氏ら一部の参加者とともに事件現場付近を訪ねることができた。大所帯でその付近を移動するのは、中国当局の監視、圧力もあり難しいそうだ。現場付近は夏の緑が鮮やかで、それでいてひっそりとしていた。言葉にできない

静けさが周囲を覆うなか、訪れた人達の話し声だけが響いた。遭難場所を車で探しながら2か所を訪ねたが、現場にいたのは合わせて20分程度。短い時間だったが非常に濃密な時を過ごした。

中国取材の後、関係者へのインタビュー撮影を本格的に始めた。登場人物全員に話を聞き終えたのは、２０１６年の10月だった。

個々の出演者についての詳細は省くが、映画では12組13人が登場し語る。その中のひとり、王桂花（日本名：鈴木春代）氏について触れたい。映画の中で王氏だけは自己紹介がない。満洲へのソ連侵攻に逃げ惑う様子を再現する一人語りから登場する。王氏、すなわち女優の神田さち子さんが演じる中国残留婦人だ。

神田さんのことは、２０１５年の夏に筆者が訪れた東京・新宿の平和祈念展示資料館で偶然知った。そのとき、彼女がライフワークとして続けている一人芝居「帰ってきたおばあさん」（原作：良永勢伊子、演出・上演台本：杉山義法）を一部上演する催しがあった。間近で見る迫真の演技に魅了された。

「帰ってきたおばあさん」は、念願かなって祖国に一時帰国できた残留婦人の王桂花が、鹿児島の浜辺で、ボランティアに自身の半生を語り始めるところから始まる。満蒙開拓団の一員として中国に渡り、幸せだったのもつかの間、ソ連の侵攻で桂花の人生は激変する…。神田さんの演劇は、葛根廟事件のことを描いているわけではない。しかし、ソ連侵攻時の混乱ぶりや、極限状況で迫られる究極の選択を描いたシーンなど、筆者が取材した方々の話ととても共通点が多いと感じた。映画では、神田さんが２０１５年11月に東京都大田区で公演した一人芝居を撮影し、劇中劇として使用させていただいた。１９９８年の初演以来、神田さんは毎年コンスタントに公演を続けている。今年7月の多摩市公演で１９２回目の王桂花を演じた。

映画の上映時間は74分だが、5月の完成を前に60分の短尺版をつくった。こちらでは登場人物が2人少ない10組11人が語り部だ。映画祭のコンペティションでは応募条件に上映時間制限を設けているものが多く、その条件に合わせるために短いものを先に完成させた。

この60分版が大分県由布市で毎年開かれている「ゆふいん文化・記録映画祭」で第10回松川賞を受賞した。映像作家・松川八洲雄監督の名を冠した賞で、大変光栄に思う。映画祭が作品を募集する案内には次のように書かれていた。

（前略）～「作り手の思い」がくっきりと見える、完成度の高い（或いは力強い）「映像記録」を全国から募集します。～（後略）

映画の完成度や力強さはさておき、とても嬉しいのは、映画をみた人が筆者の「思い」を感じとってくれたことだ。映画祭での上映後は、観客からとても大きな拍手をいただいた。筆者より若い人が葛根廟事件のことを「全く知らないことで驚き、泣いた」と感想を伝えにきてくれた。とても幸せな時間を過ごすことができた。自分のつくった映画が、公民館の大きなスクリーンに映し出された感動は、決して忘れることはないだろう。

この映画の制作を通じて、本当に多くの方々にご協力をいただいた。ある出演者は、筆舌に尽くしがたい体験を声を振り絞るように話してくださった。ある出演者は、記憶の糸をたどるようにして一語一語丁寧に証言してくださった。ある出演者は、何度も涙を流して声を詰まらせた。そして出演していなくても取材に応じてくださった方々、資料を提供してくださった方々。感謝の気持ちは、とても言葉では言い表せない。

この映画は、今後も作品を公募する国

内外の映画祭に出品する予定だ。願わくばどこかの映画館で上映できる機会を得たいが、それが難しければ、自主上映でひとりでも多くの方にみてもらえるように活動していく。読者の方々にもお目にかかる日が来ることを強く望みます。

追記

9月2日、日本記者クラブ主催で映画「葛根廟事件の証言」の上映会が開かれた。映画の出演者であり、時事通信社で記者をされていた藤原作弥氏のご尽力によるものだ。公開の決まっていない映画を紹介しても、みた方は記事にしづらいのではないかと危惧したが、「まずはみてもらうこと」という藤原氏とクラブ事務局からのアドバイスに後押しされ、上映することに。

会場は東京・内幸町にある日本プレスセンターの10階ホール。約３６０平方メートルの広間に大スクリーンが据え付けられていて、とても贅沢な規模だった。

開場前に映写状態をチェックしているときに、技師が映写室から「こんなものしかないのだが」と、遠慮がちに手のひらサイズのベルを見せてくれた。ボタンを押すと、小さいが上品な音が会場に響いた。上映開始を知らせるために鳴らすものだ。司会者がアナウンスするので本来必要ないのだが、少しでも会場の雰囲気を盛り上げようと用意してくれたものらしい。その心遣いが嬉しかった。

60人強が来場した。上映前に藤原氏、大島氏と筆者で挨拶した。両氏は、事件については概略に触れるにとどめて詳細は省き、映画のアピールに終始してくださった。両氏が国際善隣協会の岡部滋・常務理事とともに記者クラブで証言集発行の記者会見を開いたのが3年前。筆者はその様子をまとめた映像をインターネットでじっくり見た。そもそも前述の新聞記事は、その記者会見に出席した記者が書いたと推察される。今度は筆者が両氏とともに記者を前にしていることに、不思議な感じがした。

上映後、参加者数人から質問を受けた。「中国、ソ連側の公式見解は？」、「証言以外に証拠は残っていないか？」、「事件のことを知らなかった。なぜこれほどの事件が余り知られていないと思う？」などの問いがあった。やはりジャーナリズムの視点からの質問が多かったように思う。

上映会で筆者は、「映画の公開方法は未定だが、なるべく多くの方にみてもらうべく、お力添えを」と来場者にお願いした。協力的な方の計らいで、数日も経たないうちに問い合わせをいただいた。映画のことが少しずつ広まり始めているようだ。

興安街命日会を始め、多くの方が温かい目でこの映画を見守ってくださっている。記者クラブでの上映会を経験して、そのことを実感している。

追記２

映画「葛根廟事件の証言」の60分版が、公益社団法人映像文化製作者連盟（略称：映文連）が主催する『映文連アワード２０１７』で企画特別賞を受賞することが決まりました。受賞作品上映会は11月28日（火）・29日（水）の両日、ユーロライブ（ユーロスペース内／渋谷区円山町1-5 ＫＩＮＯＨＡＵＳ ２Ｆ）で開催されます。拙作はどちらかの日に1回上映される予定です。

自分の作った映画がこんなにも早く劇場でみられるようになるとは、とても感激です。関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

筆者略歴（たのうえ　りゅういち）

映像ディレクター。１９７４年大阪府生まれ。立教大学社会学部卒業。東京都在住。